

8月10日（金）

## ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 山村浩二さんのアトリエ訪問

### 1,アトリエ訪問

山村浩二さんには、国文研で研究者とのWSを行うことで、様々な資料や日本文学研究の知見に触れていただき、また私たちも山村さんのアーティストとしての立場から、絵画資料についてのお考えや、技術的なお話をうかがうことで、お互いに新しい知見を得ることができています。

今回は、山村さんが普段創作活動をなさっているアトリエへ訪問することで、アニメーションの制作方法や使っておられる道具について、現物を拝見しながら具体的に教えていただきました。



訪問したのは、入口敦志先生（当館教授）、木越俊介先生（当館准教授）、私、有澤知世（当館特任助教）です。奇しくも全員江戸時代の文学を研究しており、絵本なども大好きなメンバーで山村さんのもとへうかがうことになりました。

### 2,アニメーションを動かす

まずは大きなディスプレイの前で、アニメーションを作る作業を見せていただくことになりました。



山村さんは、ないじえる芸術共創ラボのなかで <sup>くわがたけいさい</sup> 鋏形蕙齋 という江戸時代の絵師が描いた絵手本『略画式』からインスピレーション

8月10日（金）

を得たアニメーション作品「ゆめみのえ」を創作していらっしゃいます。

「ゆめみのえ」は、蕙齋と同じ時代に活躍した上田秋成が書いた読本「<sup>よみほん</sup>夢応の鯉魚」のストーリーを枠組みとしており、私たち江戸文学研究者も興味深く見守っています。

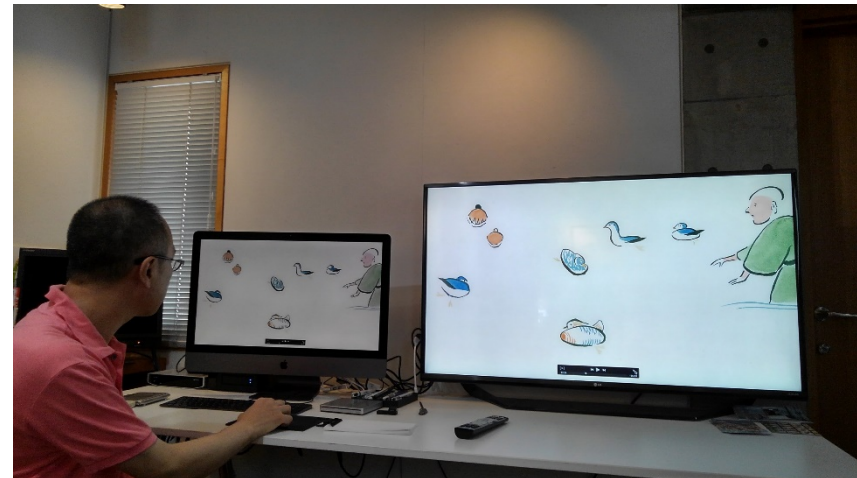
山村さんの作品は、すべて手描きの絵を元にしてしているため、一枚ずつ素材となる絵を描いてパソコンに取り込み、パーツを組み合わせてひとつずつ場面を作るそうです。

画面の中の動きは、ひとつの動き（足を動かすなど）を作ってレイヤーを重ねることで、繰り返しの動きを作るとのこと。たとえば主人公の「ケイサイくん」が歩く場面など単純に見えますが、近づくにつれ段々と大きくしたり、景色が変わるのでカメラを動かしたりする必要があります。沢山の動物や人が出てきて同時に色々な動きをする場面（ケイサイくんが歩く江戸の街の様子）は、とても複雑な作業が必要なのだそうです。

「ゆめみのえ」は基本的に、蕙齋の『人物略画式』<sup>1</sup>と『鳥獣略画式』<sup>2</sup>を模写した山村さんの絵で構成されています。全てお手本と同じ大きさ同じ色味で描くために、この作品の模本を横に置いて描いたそうです。ですから、アニメーションを作る時には原本を観察し

て描いて、それを取り込んで動かして……という繰り返しのようです。ちなみに、原本と同じタッチで描いたり、蕙齋が描いていないポーズを描けるようになるために、何度も何度も模写を繰り返したそうです（詳しくは、トークイベント「湯とアートが鳴子で会う」「山村浩二、蕙齋に逢いにゆく」で語ってくださっています）。

また、お手本とした『略画式』は静止画なので、動きを創り出すのに時間が掛かるそうです。動物たちの動きは、動画などを参照して創り出されたそうですが、山村さんは、蕙齋の描いた絵には動きがあるため自然に導きだされた動きもあります、と語ってくださいました。



---

<sup>1</sup> ヤ8-123

<sup>2</sup> ヤ8-127

8月10日（金）

また、背景の作用についても教えてくださいました。「ゆめみのえ」は基本的にあまり細かな背景がなく、全体は柔らかなクリーム色です。ケイサイくんの家などが描かれる場合でも、端が途切れているなど抜け感のある描写です。背景があると説明的で重苦しい雰囲気になり、限定的になるのに対して、背景を描き込まないことで、二次元の広がりやうまくつかうことができるそうです。このことは、「ゆめみのえ」の夢の世界を表現するのに役立っているそうです。

ちなみに、パソコンがある部屋の上の階には絵を描くスペースがあり、その隣に原画を取り込むスキャナが置いてありました。

高精細のスキャナで原画をデータ化し、細かい汚れなどを取り除く作業は、奥様が担当されることも多いそうです。



### 3,机の上の世界

山村さんはすべて手描きで作品を作っておられます。その作品たちが生まれる机はどのような様子なのでしょう。

アトリエには大きな楕円形の机が置かれており、そこには様々な種類の画材が並べられていてとてもカラフルです。ペンや筆も様々な大きさ、形のもが沢山置かれていてとても賑やかですが、どこか整然としており、山村さんの頭の中を覗かせていただいているような気持ちになりました。

画材は作品によって使い分けておられるそうですが、長い作品を描いている時に画材がなくなってしまい、在庫も切れて続きが描けないということが起こらないよう気をつけておられるそうですが、それでも廃盤になってしまうものもあるのだとか。



8月10日（金）

また机の上には、今同時に取り組んでいらっしゃる作品の束がいくつも置かれていました。それぞれ全く違う世界観で、これらを同時に考えたり表現したりできる山村さんは、世界がどのように見えておられるのだろうかとても不思議に思いました。

山村さんは職人のように「内容に従事する」という気持ちで創作に取り組んでおられるのだと教えてくださいました。絵本の仕事であればテキストから作品世界を膨らませることもあるし、作品によって気持ちの持って行き方が違うのだそうです。とてもストイックな姿勢に驚かされます。

ちなみに、その日の気分によって取り掛かる仕事の順番を決めたり、途中で仕事以外の作品に取り掛かったりされるそうで、私たち研究者も同じような仕事の進め方をすることが多いので、少し親近



感を抱いた部分もありました。

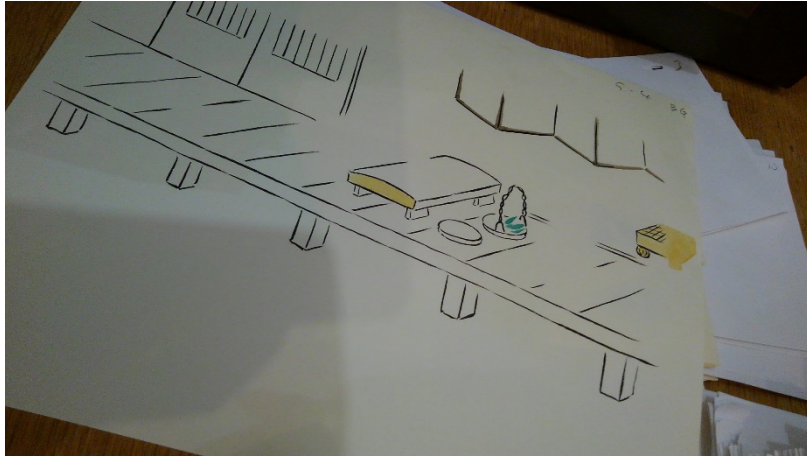
また、前述のように、『略画式』を横に置いて何度も模写したという山村さん。机の上で、原画と『略画式』とを並べて見せてくださいました。



壁にも進行中の作品の原画や色のサンプルなどが貼ってあり、ま

8月10日(金)

さに山村ワールドといった様相でした。



#### 4, 山村さんのコレクション

山村さんのアトリエには、至る所に不思議な形をした道具や時計が飾ってあります。海外の蚤の市などでよくわからない道具を見かけるとついつい買ってしまふのだとか。

8月10日（金）

壁にはたくさんの原画コレクションも掛けられており、山村さんの好きなものが詰め込まれた素敵な空間でお仕事をなさっているのだと感じました。



また、海外の古い絵本コレクターでもある山村さん。海外の古本屋を巡ってこつこつと集めておられるそうで、この日はその貴重なコレクションの一部を見せてくださいました。

絵を描く机の後ろに置いてある棚には、カラフルな絵本がぎっしりと入っており、どれも趣向が凝らされています。マッチ箱のように小さなものもあり、江戸時代の絵本が大好きな私たちは夢中で拝見しました。

特に印象的だったのは、フランスの絵本作家モンヴェルの作品で

す。ひとつひとつの色使いが素晴らしく、また、信じられないほど細かな仕事が施されていることがよくわかります。



昔の絵本は、ページの記号にも装飾が施されていたり、変わった装訂がなされていたり、とても凝ったものが多い印象です。山村さんは「過去の偉大な仕事を見ると刺激になります」と語ってくださいました。

ひとつひとつの絵本を楽しそうに紹介して下さったり、作者の工夫や印刷技術に敬意を抱いておられる様子は大変印象的で、『略画式』の大変優れた模本が山村さんの許へやって来て、新たな創作の源となっていることも併せて思い起こされ、本が然るべき人の手に

8月10日（金）

渡り大切にされる幸せな例だなあとしみじみ思いました。

沢山のお仕事を同時にされながらも、ご自身の美意識や好奇心を大切にしておられる山村さんのお人柄や生き方が、アトリエ全体に行き渡っているように感じ、山村さんの創作活動一端を垣間見ることができました。

